

保 育 奉 公

大 東 亞 戰 爭 必 勝 完 遂

明治天皇御製

教 育

國のため力つくさむわらはべを教ふる道にこゝろたゆむな

教育はいろくこのころから行はれる。教育の對象たる兒童に就ての觀方、すなはち兒童觀も人さまよである。しかもわが國の教育の本旨、わが國の兒童觀の本領、いづれも一つにしてまざりなく、まぎひない。兒童は長じて國のために力つくさむさしてゐるものである。教育は兒童をして國のために力つくし得るやう教ふる道である。この教育の要旨を今日、皇國の道に則る國民鍊成といふ。畏くも明治天皇は、三十五年の昔此の御製において、此の兒童觀を教育本旨を、いさもすらく御示し下されてある。しかし、その貴いわらはべを教ふる道にこゝろたゆむなき諭し給うてある。そのわらはべの教育を任せざるわらへへの御製である。

明治三十七年、あの大きい戦のはじめの年の御製

ことしげき世にはあれども國民を教ふる道に心たゆむな

は、如何に多事の最中ミ雖も教育といふこのゆるがせにしてならぬことを世に教へ給うたのである。或は、さうなり易き世を戒め給うたのである。その年から越えて四ミせ、更に皇國教育の本義を以て、實際教育者に諭し給うたのである。

今や皇國未曾有の大戦争に際して多事無限、われら亦思ひ静かなり難し。敵を撃つことに急にして、幼兒の如き顧るに暇なからんミせざるにあらず。この時舊來の兒童觀の加き一顧の價値なからんミさへする。たゞ、國のため力つくさむわらはべなることを思ふ時、われらの心一刻のゆるみを許されないのである。

この有り難き御製の謹誦を以て今年間の巻頭の筆を擱く。恐懼言葉を知らない。

(倉橋惣三謹誦)